

話のできない自分が一人いるとすれば、私は孤立してしまふ。そこには多数対少数という線引きができ、多数は大切にされ少数はないがしろにされるといふ構図が生まれる。高度経済成長期、バスに乗り遅れた人たちは偏見を持って受け止められた。昭和35年、貧困者対策として位置付けられていた法律を、「精神薄弱者福祉法」に変換させ、恩恵を受ける立場から権利者としての立場へと彼らを上上げ、国のしくみを変えて知的障害のある人たちを守ったのである。物を作ることに最優先された時代に、「この子らは光っていますよ」と発信し続けた糸賀が格闘する姿から学ぶ私たちでありたいと思う。

③ Capacity building

発達保障、人格形成

「イエスはお答えになった。…神の業がこの人に現れるためである」(ヨハネによる福音書9:3)

「重度の障害を持って生まれた彼らについて、私たちは何を知っているのか。彼らに対して、また彼らとともにどういう生き方をしてきたのが問われている。どんなに重い障害を持っていても、誰と取り替えることもできない個人的な自己実現をしている。その自己実現こそが創造であり、生産である」という糸賀の指摘は鋭く重い。その子なりに成長し発達していく光を見つづける療育(治療と教育)に神の業が現わされていることを思わせる実践である。

「わたしの目にあなたは値高く…」(イザヤ書43:4)

障害を持った子どもの多くの親は、そ

の子の将来を思い、さまざまな葛藤の中にある。世間や家族の目も冷たい。その両親の重荷を理解しともに歩んでくれる人が果たしてどれだけいるのか。多くの痛みを持った親を支えた糸賀の働きの原点は、「値高く尊い」という主の力強い励ましであり、この聖句が多くの親たちの救いとなっているのである。

④ Community (地域コミュニティ)

「互いに愛し合いなさい。…わたしの弟子であることを皆が知るようになる」(ヨハネによる福音書13:34・35)

昭和27年、地域で生きていけるようにと信楽学園を創設した時、とても大きな反対・排斥運動が起こった。しかし河川氾濫の災害があったとき、復旧作業に汗している子どもたちの姿が、地域の人々の考え方を一変させた。ホームレスとは、路上で生活をする方だけではない。家があっても居場所がないホームレスの人たちが多く、コミュニティが混乱している今、ともに生きることの大切さを糸賀の取り組みを通して学ぶ必要がある。

⑤ Christ

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。」(詩編23:1・3)

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイによる福音書11:28)

①～④の4つのCを横軸に、中心に⑤ Christすなわち「キリストの愛」という縦軸を置く。キリストは、苦しむ人間の姿に駆け寄り、寄り添い、その痛みを取り去ろうとされた。人間に対する深い愛情があったから。そこを縦軸としたい。

私が糸賀一雄から学ぶ『人生の十字架』である。「おめでとう」で始まり「ありがとう」で終わる人生は、たくさん支えてくれた人たちによって光を増し輝いている。(文責 高取芳郎)

鳥取で培われた

糸賀師の高い志

松田 章義

糸賀一雄の生誕一〇〇年に当たり、県内各地で記念フォーラムなどが開催された。この機会に改めて糸賀の人柄と高い志、そして日本の障害福祉を切り拓いた業績を明らかにし、使命を共有したい。



二中時代の糸賀

糸賀は、一九二四年(大正三三)年、鳥取市で生まれた。笑顔の絶えない、おだやかな

少年であった。米子へ転居したが、家庭の事情で再び鳥取に帰り日進小学校に転校。卒業後、県立鳥取第二中学校(現・鳥取東高校)に入学した。

当時の鳥取二中は、自由・親和・進取の校風のもと、師弟一体で勉学・部活・奉仕に励み、糸賀は心豊かに成長した。

在学中に友人に誘われ日本基督教団の鳥取教会へ熱心に通った。宣教師らから英語・聖書などの指導と強い感化を受け

て小さき者への愛が培われ、一九三二年、前田彦一牧師より洗礼を受けた。この頃、糸賀は「この世に生まれて、自分のなすべき仕事は何か。いずれ神の啓示があるだろう」と思索を重ねた。

糸賀が生まれ育ったルーツ鳥取の学校・教会などでの交わり、文化・風土で培われた豊かな人柄と強い使命感、高い志が原点となって、「啓示のひらめき」を受け止め、なすべき仕事が決まった。

それは、第二次大戦後の貧困と混乱の中で近江学園を創設し、戦災孤児の救済と知的障害児の教育を行うことであった。糸賀は、さまざまな思考と実践を通して、「この子らを世の光に」との凝縮した愛と理念に到達し、この子らは自ら輝く素材だからと、支援を深めていった。

晩年、講演で漢詩の一節「白鳥蘆花に入る」を引用し、「淡紫色の花のついた葦の穂かげに白鳥がいる。福祉の仕事は、そのように地味で目立たず、しかし存在するものだ」と福祉関係者に語った。また、頑なに「自分の子どもでも特別扱いほしくない。施設は世襲しない。福祉屋になるな。」と言いつづけたという。

一九六八(昭和43)年、大津での新任職員研修会で講演中、「愛があるから育つ。この子らを大切に…」と語りつつ、壇上で倒れた。享年54歳であった。

強い衝撃と深い悲しみが、全国に広がったことをまざまざと思い出す。新聞のコラムで「糸賀氏は、日本の文明を質的に高めた」と、その人柄と功績を称えた。21世紀、真の共生社会づくりをみんなが進めることが、糸賀師の願いと思う。